

開会の挨拶

淡 路 敏 之（京都大学理事・副学長／教育担当）

東北地方・太平洋沖地震直後の時期に、また年度末のご多忙の折に、京都までお出でいただき感謝申し上げます。本学も現在、被災地域からの入学生に対して、入学手続きの期限をどうするか、今後どのようにサポートするか等といった対応や、さらに原子力発電の問題が重なり、東京で予定されていた催しの相当数が京都開催に変更要請されるなど、多忙な状況にあります。加えて、本日の午前には本学医学部人間健康学科のFDがあり、2時間程度出向いて今しがた戻ってきたところ、急用が入ったものですから、出席が遅れ大変失礼いたしました。伏しておわびをいたします。

本FDフォーラムはソフト・ハードの両面において、日本のコアとしての役割を担っていると聞いております。これもひとえに皆さま方のご尽力によるものと考えます。中教審や日本学術会議の答申等でも指摘されていますように、変革期の社会にあって、国際通用性のある、専門力を生かせる総合力育成の教育の充実に、文部科学省等も大きな関心を抱いていますし、京都大学も実践していきたいと思っています。

このような貴重な機会に、全国の皆さま方の成功例、あるいは今後に向けた課題などを共有し、有意義なシンポジウムとなることを祈念しております。どうかよろしくお願いいたします（拍手）。

（大塚） 淡路先生、どうもありがとうございました。

シンポジウム「単位制度から見る教授学習・カリキュラム」

司会 大塚 雄作（京都大学高等教育研究開発推進センター教授）

松下 佳代（京都大学高等教育研究開発推進センター教授）

（大塚） それでは、元気を出してシンポジウムの方を始めたいと思います。シンポジウムは私、大塚とセンターの松下の方で進行を務めさせていただきます。前半は松下の方で進行を担当いたしますので、バトンタッチしたいと思います。

（松下） よろしく申し上げます。例年ですと、このシンポジウムに先立って基調講演を設けていました。しかし今年は「単位制度から見る教授学習・カリキュラム」というテーマで5人の方にご報告いただき、フロアの皆さまも含めて時間をかけてじっくり議論を深めたいということで、あえて基調講演は設けませんでした。

本日ご報告いただくのは、大学評価・学位授与機構の森利枝先生、本センター准教授の溝上慎一、本学医学研究科医学教育推進センターの森本剛先生、広島大学大学院工学研究院の伊藤浩行先生、それから、創価大学教務部課長の澤登秀雄さんです。よろしくお願いいたします（拍手）。

京都大学は、自由の学風、あるいは自学自習を理念としていまして、私の学生のころは、文学部などは5月の連休明けに授業が始まって、6月中には終わるといわれていたくらいなのですが、さすがに最近は、わが京都大学でも「単位制度の実質化」というフレーズを耳にするようになってきました。単位制度の実質化については、半期15コマあるいは16コマを必ず確保するようにいわれている大学も多いのではないかと思います。それに対して、大学教員がさまざまな仕事で非常に忙しくなっている中で授業を15回必ず確保するということは難しい、というような声も聞かれます。

それから、皆さまもご存じのように1単位は45時間の学修をもって1単位とみなされているわけですが、実際に15回の授業を確保しても、授業外学習を何もしていなければ実質化はしていないわけです。その授業外学習のことをなおざりにしたまま、15回の授業だけを確保するというのが先走りしているという実態もあります。